



## 千年の都と渋沢栄一

校長 清水 一司

6月19日、本校の修学旅行は大宮駅から東京駅までの班別行動に始まりました。東京駅生徒集合までの時間、私は東京駅丸の内口駅舎を眺めることにしました。赤煉瓦でできた美しく堂々たる姿の駅舎を前に私は、「当時の人々はこの建物に日本の近代化を感じていたのだろうか…。」などと想像を巡らせていました。この駅舎は、渋沢栄一が深谷に設立した煉瓦工場で生産した煉瓦を使用して大正3年（1914年）に完成しています。渋沢栄一がいなければ我が国の近代化の象徴ともいえるこの駅舎が存在しなかったかもしれないと考えると、渋沢栄一は新一万円札の顔となるに相応しい偉業を成し遂げた人であると思います。

東京駅を出発した我々一行は、まず奈良・東大寺へ向かいました。奈良に到着した生徒は、想像を遥かに超える大きさの伽藍や、往時を偲ばせる街並みを前に、衝撃を受けたとともに先達の知恵や技術に驚きを覚えたに違いありません。その後、生徒は京都を目指して各班が思い思いに立てた計画に従って行動しました。奈良方面から京都中心部にある旅館に最寄りの神宮丸太町駅への移動には、途中で京阪電車への乗り換えが必要になります。この京阪電車ですが、明治39年（1906年）に渋沢栄一が創立委員長として立ち上げた会社であると沿革にありました。我々は思いがけないところで渋沢栄一の恩恵を受けていたのです。

6月21日、今回の修学旅行は京都駅前のホテルのランチで締めくくりました。3日間を古都で過ごした生徒には、窓越しに新幹線が見える現代的なホテルの空間が、奈良・平安の時代から現在へと1000年以上の時間を移動するタイムマシンのように感じられたかもしれません。食事後にホテルの資料を確認すると、何と、このホテルも渋沢栄一が創業に関わった企業グループの経営だとありました。我々の修学旅行は、渋沢栄一の功績なくして実施できなかったのです。

「仕事とは追いかけるものであって、追われるものではない。」

「仕事は人生に貯金しているようなものと考えて取り組むことが肝要だ。」

約500社の企業、約600の教育機関や社会公共事業、研究機関等の設立・支援に関わった渋沢栄一の言葉だけに説得力があります。この言葉の「仕事」を「勉強」に置き換えて生徒に伝えたい。今回の修学旅行で、生徒には千年の都の歴史から学んでもらうことはもちろん、渋沢栄一の生き方や考え方にも学んでもらいたいと感じました。

